

心理学の授業における映画教材の活用

瀬戸 美奈子

1 はじめに

心理学教育においては、対象である人間の行動を観察、調査、実験などによってデータ収集し、得られた情報をもとに理解していくことが不可欠であり、専門科目やPBLセミナーにおいてはこれまでも展開されてきた。しかし、共通教育「心理学Ⅰ」「心理学Ⅱ」においては受講学生の人数が多いこともあり座学中心の授業展開になる傾向があった。そうした授業を改善するために心理学Ⅱの授業において映画を教材化して活用することを考えた。

心理学教育において映像教材の活用は、内容面や操作性の問題がある一方で教員側のニーズが高いことが大学教員への調査結果から報告されている。⁽¹⁾ 映像教材の中でも映画を用いて心理学の視点から読み解く試みは、これまで主に臨床心理学の領域でなされてきた。網谷⁽²⁾は精神疾患に対する理解を促進するために、映画による事例提示を行った実践と効果を報告している。また恒吉⁽³⁾は対象関係論、エディプスコンプレックスといった精神分析学の観点から映画を分析し、教材化することで心的な事象の理解を促進することができることを指摘している。臨床心理学領域以外では、心理学の授業で映画を用いた実践はまだ少ないが、アメリカ心理学会（APA）がまとめた心理学教育のためのアクティビティの一つとして、葛藤解決のプロセスの検討のために「ロミオとジュリエット」の脚本や映像を用いた授業実践が紹介されている。⁽⁴⁾ 心理学教育における映画教材の活用はまだ心理学全般において実践されているとは言い難いのが現状であろう。

そこで心理学Ⅱの授業では、臨床心理学領域にとどまらない幅広い心理学領域において、映画教材を用いることを試みた。学生が主体的に学習し、心理学の知見をもとに人間の行動や心理を読み解く力を身につけることをねらいに展開した授業実践を報告する。

2 授業の概要

(1) 対象

心理学Ⅱ（後期）2クラス（受講者60人、87人）

(2) 授業の目的

- ・人間の行動を心理学の視点から理解できる
- ・適応と精神的健康についての理論を理解できる

(3) 教育目標

- ①感じる力（共感、モチベーション、主体的学習力、心身の健康に対する意識）
- ②考える力（幅広い教養）
- ③コミュニケーション力（討論・対話力、社会人としての態度）
- ④生きる力（感じる力、考える力、コミュニケーションを総合した力）

(4) 授業の構造

全15回において映画を教材として視聴した。15回の授業は、適応、発達、対人関係、その他と大きく4つのカテゴリーから構成されている。教材を選ぶにあたっては、年代、ジャンル、邦画、洋画と多岐にわたるように配慮し、全体のストーリーから30分程度を取り出して視聴しても分析可能であると判断した映画を用いた。映画教材のリストは表1の通りである。なお15回目については学生から映画を分析する観点および推薦映画を募り、学生による投票で受講クラスごとに映画を選定している。

(5) 授業展開

授業は各回に関連する心理学の知識を解説した後、学生に本時のテーマを提示し、分析のための作業ワークシートを配布する。そのテーマにそった形で映画を分析する観点を説明する。学生は映画を視聴しながら、登場人物の行動や心情などについてワークシートに記入し、そこで得られた情報から各自が分析を行う。個人の分析をもとにグループで討議し、さらに各個人が本時のテーマにそってミニレポートをまとめて、作業ワークシートとともに提出するという流れをとった。

提出された作業ワークシートとミニレポートについてはABCの3段階で評価し、次の時間に返却を行なった。次時の冒頭でレポートに対するコメントと補足を行い、テーマに関連した他の映画を紹介、テーマのまとめとした。

表 1 心理学Ⅱで用いた映画教材

適応	1	発達障害	レインマン	1988	アメリカ
	2	心の健康	ビューティフルマインド	2001	アメリカ
	3	ストレス	アナライズミー	1999	アメリカ
発達	4	発達（幼児期・児童期）	となりのトトロ	1988	日本
	5	アイデンティティ（青年期）	スパイダーマン	2002	アメリカ
	6	自己意識	ローマの休日	1953	アメリカ
対人関係	7	コミュニケーション	라이어라이어	1997	アメリカ
	8	友人関係	下妻物語	2004	日本
	9	苦手な人との付き合い方	ドライビングミスデイジー	1989	アメリカ
	10	家族関係	東京物語	1953	日本
その他	11	ファンの心理	キサラギ	2007	アメリカ
	12	恋愛	ロミオとジュリエット	1996	アメリカ
	13	動機づけ	キューティブロンド	2001	アメリカ
	14	影響力	12人の怒れる男	1957	アメリカ
学生推薦	15	ポジティブシンキング	イエスマン “YES” は人生のパスワード	2008	アメリカ
		アイデンティティ	劇場版ポケットモンスター ミュウツーの逆襲	1998	日本

授業展開および時間配分

- ①教員によるテーマの概説(20分)
- ②映画を分析する観点の説明(5分)
- ③映画視聴とワークシート記入(35分)
- ④個人とグループによる映画分析(20分)
- ⑤提示されたテーマにそったミニレポート作成
(200字)(10分)
- ⑥次時にミニレポートの講評と補足説明

3 授業実践例

ここでは全15回の授業のうち、第2回、4回、6回、7回の授業実践を紹介する。

(1)第2回(適応)

本時のテーマとして「心の健康」を提示し、心の健康を測る指標と、精神的健康を害する要因について簡単な説明を行なった。

教材は『ビューティフル・マインド』(原題 *A Beautiful Mind*)、ロン・ハワード監督による2001年のアメリカ映画である。ノーベル賞受賞の天才数学者、ジョン・ナッシュの半生を描いている。理系の学生の中には既に授業でゲーム理論について学習した学生もおり、実在の人物ということで興味関心を抱いたようであった。

授業ではまず以下のようなあらすじを学生に紹介した。

1947年。ジョン・ナッシュ(ラッセル・クロウ)はプリンストン大学院の数学科に入学する。彼は「この世の全てを支配できる理論を見つけ出したい」という願いを果たすため、一人研究に没頭していくのだった。そんな彼の研究はついに身を結び、「ゲーム理論」という画期的な理論を発見する。

やがて、その類いまれな頭脳を認められたジョンは、MITのウィーラー研究所に採用され、愛する女性アリシアと結婚する。だが、未だに終わる気配のない冷戦が彼の人生を狂わせる。彼の頭脳に目をつけた軍が、敵国の暗号解読を彼に強要してきた。

そして映画を視聴しながら①ジョン・ナッシュの性格を具体的なエピソードをあげながらまとめる、②ジョン・ナッシュは何に苦しんでいるか、③自分が彼の友人や家族だとしたらどのようなことができるか、の3点についてワークシートにまとめるように指示した。

まず個人でワークシート①②をまとめる作業を行なった後、グループを編成し、①と②について検討した。映画のエピソードを具体的にあげながら、学生たちはジョン・ナッシュが人と関わるのが苦手、完璧主義、柔軟な思考ができないといった性格であると分析した。彼は事件に巻き

込まれ生命の危機を感じながらも、そのことを誰にも相談できずに苦しんでおり、精神的な健康を害していると解釈した。①と②の課題についてグループでまとめた後、再度「ジョン・ナッシュは何の病気だろうか」「どこまでが本当のことでどこまでが妄想であるか」と問題を投げかけ、統合失調症の病名を告げたところざわめきが起った。学生はこれまで自分たちが現実と思って視聴していたストーリーが主人公の妄想の世界であったことに初めて気づくことで、精神疾患の問題を理解する難しさを体験することができた。そして理解されない苦しみを抱える患者本人に共感し、周囲のサポートの重要性について実感することができた。その気づきをもとにワークシート③についてグループで検討し、本時のミニレポートを各自がまとめた。ミニレポートではパーソナリティの問題に結び付けてしまうことで疾患に気付きにくくなるという問題点や、患者を支える家族もサポートしていくことが必要ではないか、妄想や幻聴という症状とつきあいながら社会生活を送っていくことで、本人のペースで就労していくことも可能になるなど、広く精神疾患の問題と援助をとらえたコメントが見られた。

次の授業時には精神障害の症状についての補足を行った後、偏見を持たずに患者を理解し、受容することがサポートにつながっていくこと、病気をもちながらも能力を発揮し社会に適応していくことの可能性についてコメントし、まとめとした。

(2)第4回（発達）

『となりのトトロ』は1988年のスタジオジブリ制作による日本映画である。

昭和30年代前半の日本を舞台にしたファンタジー。都会から田舎の一軒家へ引っ越してきた草壁一家のサツキ、メイ姉妹と、「トトロ」との交流を描く。主な登場人物は以下の4人とトトロである。

サツキ：草壁家の長女。12歳の小学6年生。

メイ：草壁家の次女。4歳。

草壁タツオ：サツキとメイの父。32歳。東京にある大学で、非常勤講師として考古学を教え、生活費を稼ぐため翻訳の仕事（主に中国語）もこなす。

草壁靖子：サツキとメイの母。体が弱く、「七国山病院」に入院している。

この映画は未見の学生がほとんどおらず、中にはこれまでに数回視聴したという学生もいた。ストーリーについて

は十分に理解している映画を異なった観点で分析するとどうなるか、という面白さを味わえる題材といえよう。

本時のテーマとして「トトロはサツキとメイにとってどんな存在なのか」を提示し、視聴前に発達心理学においては「imaginary companion(IC)」という概念があること、ICの機能や子どもの発達との関係について解説を行なった。分析ワークシートではサツキ（児童期）、メイ（幼児期）の姉妹について行動、コミュニケーション、その他の観点から二人の違いを分析し、トトロとの出会いの場面からトトロの存在についてグループで検討させた。話し合いの過程の中で、幼児期のメイにとってトトロは遊びを共有できる仲間であるのに対して、児童期のサツキにとってトトロは母親不在の状況に過剰適応している自分を保護してくれる存在ではないかという指摘が出され、その違いがトトロ登場シーンにおいてはメイのほうから積極的にトトロとコミュニケーションをはかろうとしているのに対し、サツキに対してはトトロがそっとよりそ形で登場するシーンに表れていることが取り上げられていた。病院にいる母を訪ねようとしたメイが道に迷い行方不明になる事件が後半の中心であるため、これまではメイの視点で見ていたが、サツキに視点を移すことでトトロの存在が複層的な意味を持つことに気づいた、トトロを見て初めて泣けた、といった新しい魅力に触れたコメントが映画への感想として寄せられた。

(3)第6回（発達）

『ローマの休日』（原題 *Roman Holiday*）は1953年製作のアメリカ映画である。監督はウィリアム・ワイラー、王女と新聞記者との切ない1日の恋を描いている。1953年度のアカデミー賞において、主役の新人オードリー・ヘプバーンがアカデミー最優秀主演女優賞を受賞した。学生たちにとってタイトルは聞いたことがあるが映画は未見である者がほとんどであった。以下があらすじである。

ヨーロッパきっての古い歴史と伝統を持つ某国の王女アン（オードリー・ヘプバーン）は、ヨーロッパ各国を表敬訪問中であつた。最後の滞在国であるイタリアのローマで、夜、密かに城を抜けだした王女は、直前に打たれていた鎮静剤のせいで路傍のベンチでうとうとしはじめる。そこに通りかかったのが、アメリカ人新聞記者のジョー・ブラッドレー（グレゴリー・ペック）だった。見かねて介抱するうち、いつの間にか王女はジョーのアパートまでついて来てしまう。

翌朝になって彼女の素性に気づいたジョーは、王女の秘密のローマ体験という大スクープをモノにしようと、職業を偽り、王女を連れ歩くことに成功する。アンはまず美容院で髪の毛を短くし、スペイン広場でジェラートを食べる。その後ジョーとベスパに二人乗りしてローマ市内を廻り、真実の口を訪れ、サンタンジェロ城前のテヴェレ川でのダンスパーティーに参加する。

自己概念や公的自己意識、私的自己意識について概説し、アン王女の自己概念の変化について分析することを課題とした。分析のために WAI (Who Am I) 法を取り入れ、①城を抜けだす前、②ローマ市内をめぐっている時、③城に戻った時の3つの場面の比較を行なった。WAI 法は「私は」で始まる文を数多く埋めることで自己概念の表出を促す方法である。具体的には場面ごとに「私(アン王女)は」に続く文を8つ考えた後、アン王女の自己意識をまとめた。城から逃げ出す前のアン王女については「わたしは不自由である」「私は外に出たい」「私は上品でなければならない」などと記述し、周囲の期待に応えるために自己を抑圧しているアン王女の自己概念と、ローマの休日の後、城に戻ったアン王女の自己概念を比較することで精神的な成長を読み取ることができた。王女の社会的自己と、一人の若い女性としての葛藤を描くたった2日間の物語であるが、一晚の経験を経て、自己が統合されるプロセスを映画視聴によって体験した。本時のミニレポートは映画の感想についてまとめさせたが、最後の記者会見のシーンでの「王女様、思い出に残るところは」という質問に「ローマです」と毅然とスピーチする姿や、お城の寝室で少女らしい白い服を着ていた王女が戻ってきた際には大人っぽい黒い服を着て登場するなど、主人公の精神的な成長がファッションや言動に表れていることについて触れた感想も多く見られた。また初めて白黒映画を視聴した学生が大半であったが、昔の映画であっても共感できる部分が多く興味を示すコメントがみられた。

次時の冒頭で社会的自己についてまとめながら、主人公を演じたオードリー・ヘップバーンの生き方も紹介した。

(4)第7回(対人関係)

『라이어 라이어』(原題 *Liar Liar*) は1997年のアメリカ映画、監督トム・シャドヤック。

フレッチャー・リード(ジム・キャリー)は自他共に認める一流の弁護士。どんなに無理な依頼でも、彼は得意の“嘘”で無罪を勝ち取ってしまう。そのいかなる時も嘘を

ついて切り抜ける姿勢は私生活でも変わらず、そんな彼に妻のオードリーは愛想を尽かして息子のマックスを連れて出て行ってしまふ。それでも彼は嘘をつくことをやめず、マックスの誕生日パーティをすっぽかし、またも適当な嘘でごまかすのだった。その夜、傷ついたマックスは「パパが一日だけでも嘘をつきませんように」と神に願う。するとフレッチャーは絶対に嘘をつけないようになってしまった。そして順調だった彼の人生は一変する。

本時のテーマは「正直であることは善であるか」である。円滑なコミュニケーションと嘘の関係について考えるために「欺瞞性」という概念について解説を行なった後に映画を視聴した。フレッチャーのつく嘘の欺瞞性の程度について①あいまい度、②生起頻度、③立証可能度、④好意性の4つの観点から分析をし、グループで嘘の効用と問題点について検討した。嘘をつくことが人付き合いを円滑にするための一つの戦略であり、自分も相手も守る誠実さの表れである一方で、嘘をつきすぎると本人でさえも自分の本心に気づきにくくなる、罪悪感を抱く、嘘をつかれた立場の傷つきといった嘘の功罪について多面的に論じることができた。

4 学生の授業感想より

15回の授業を実施後、映画教材を用いた今回の授業実践についての感想を学生に自由記述で書いてもらった。自由記述の分析から次のような効果と課題があることが示唆された。

(1)理解の促進

- ・映画は一貫性、ストーリー性を重視するのでキャラクターの心情がつかみやすく心理学入門としてはとても面白い。
- ・ただ説明を受けているだけでは、ああそうかと知るだけだが、映画を通してみることでその内容を深く理解することができた。
- ・文字だけで心理学の用語などを学ぶよりも実際に映画で人の心の動きや心情を観察していくところがよかった。
- ・説明だけでなく実際に自分で考えることで知識がより身についた。
- ・映画をみること自体10年ぶりくらいだった。映画を見ることで心理学の理論を追体験できるのはなかなか工夫されていていいと思う。
- ・最初のほうの授業からかなり時間がたっているけれど映

画も内容も覚えているし、おおまかな心理学的要素もセツトで思い出せるのでわかりやすい授業だった。

心理学の知識をもとに映画の登場人物を分析するという作業を通して、理解が促進され、より深い内容理解に結びついたことが示唆された。

(2)興味の喚起

・映画を授業の教材に取り上げることは珍しくないが、この授業のように心理学の観点から映画を見るのは初めてでどの回も面白かった。

・知っている映画でも心理学という新しい観点から見られたので面白かった。

・毎回みる映画が違うのでマンネリ化することなく集中できる。

・この授業は映画を見るという新しい形が取り入れられていて、新鮮な気持ちで授業に取り組むことができた。心理学についてもっと深く学びたいという気持ちがさらに高まった。

・なんとなく見るよりも視点をあらかじめ指定されている方が集中できてよかった。当たり前のことであるが、身近なところに心理学があることに驚いた。

映画教材を毎時間用いるという方法は多くの学生にとって新鮮であり、学習への意欲や関心が高まったことが示唆された。

(3)主体的な学習

・様々な映画を見るきっかけとなる良い機会だった。ただ見るという受動的なスタンスから心理学的な意味を探してみようという積極的な見方をする意識をするようになった。

・この授業を通して人間的に少しでも成長できたと思う。純粹に面白い映画に何本も出会えたので、春休みにみておきたい。

授業での映画視聴が一部分に限られていたため、授業後に自分でDVDをレンタルして最後まで視聴した学生も多くみられた。また授業を応用して、他の映画やドラマを心理学的な観点から考察しようとするなど授業以外の場での主体的な活動に結びついたことが示唆された。

(4)グループ学習による効果

・分析はグループ単位で話し合うことで、自分の意見にどれだけの説得力があるかわかり、他の視点で分析しなおすことができた。

・グループでそれぞれ考えながら学んでいく形式だったの

で、本当に自分たちで学んでいるという認識があった。

映画教材を用いたことそのものによる効果ではないが、グループ学習を取り入れたことによって、主体的に、多角的な視点から映画を分析できたことが示唆された。

(5)課題

・途中で止められると消化不良になるので、2コマ続きにするか、次の週で残りを見るかというシステムにしてほしい。

・時間的に仕方がないとは思いますがどの映画も中途半端にしは見られなくて終わりが気になってもやもやしてつらかった。

・たまにとても難しいと感じることもあった。

課題としてはストーリーの一部分を取り出して視聴することによる不全感と、映画の分析という手法に慣れていないための抵抗感があげられる。この点については今後PBLセミナーでの授業展開を考慮にいれ、改善していく必要があるだろう。

(1) 伊藤秀子・宮本 友弘・大野木裕明・中澤潤・宮本正一・魚崎祐子 心理教育における映像教材の利用とニーズ (Ⅱ) ニーズの分析 日本教育心理学会総会発表論文集 (46), 506, 2004

(2) 網谷綾香 映画を用いた講義の効果 心の病気に対する臨床心理学的理解の促進 日本教育心理学会総会発表論文集 (49), 79, 2007

(3) 恒吉徹三 臨床心理学的視点を理解するために視覚的媒体を用いること (その3) 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第 19 号, 135-142, 2005

(4) Robert A. Goodale ロミオとジュリエットと葛藤解決 L.T.ベンジャミン・ジュニア編 中澤潤・日本心理学会心理学教育研究会監訳 心理学教育のための傑作工夫集 北大路書房 245-248, 2010